

TERG

Discussion Paper No.336

「政治」の「文化」から「政治的なるもの」の「文化変容」へ
—工藤光一のフランス史研究に寄せて—

小田中 直樹

2015年5月1日

TOHOKU ECONOMICS RESEARCH GROUP

GRADUATE SCHOOL OF ECONOMICS AND
MANAGEMENT TOHOKU UNIVERSITY
27-1 KAWAUCHI, AOBA-KU, SENDAI,
980-8576 JAPAN

「政治」の「文化」から「政治的なるもの」の「文化変容」へ

—工藤光一のフランス史研究に寄せて—

小田中直樹 (odanaka@econ.tohoku.ac.jp)

- 1.はじめに
- 2.アーギュメントの評価 ①要約／②貢献
- 3.テキストの比較 ①削除／②加筆／③修正
- 4.残された課題
- 5.おわりに

付 工藤光一業績リスト（代表的なもののみ）

本稿は、

(1)「工藤光一追悼研究セミナー」（東京外国語大学海外事情研究所など主催、2015年6月21日、東京外国語大学、予定）におけるトークで用いられる。

(2)日本学術振興会科学研究費・基盤研究(c)（研究代表者・小田中直樹、課題番号 15K02925）、同・基盤研究(b)（研究代表者・角松生史、課題番号 15H03290）、同・基盤研究(a)（研究代表者・糠塚康江、課題番号 26245003）、日本学術振興会委託研究事業（2015年度）にもとづく研究成果の一部である。

(3)未定稿ゆえ引用不可。

1.はじめに

桜散り、若葉萌出る4月半ばの仙台。ぼくの机のうえには『近代フランス農村世界の政治文化—噂・蜂起・祝祭』（第二候補として『農村世界の深層の政治史へ——一九世紀フランスの噂・蜂起・祝祭に見る政治文化』という題も付記されている、以下『政治文化』）と題された手稿がある。岩波書店「世界歴史選書」の一冊として構想され、『喧騒と歓喜の農村世界—フランス近代の政治文化』という仮題のもとに刊行が予告されながら、病を得たがために惜しくもエピローグを残して完結しなかった工藤光一さんの著書第一作の原稿である。手稿すなわち未定稿ではあるが、本稿を準備するため、特別にアクセスを認めていただいた。関係各位に謝意を評したい。

A4版で約180ページ、四百字詰め原稿用紙換算で500枚強の分量からなる『政治文化』を繰っていると、工藤さんとともにした、決して長くはないが濃密な時間が蘇ってくる。その中核をなすのは1990年代初めのフランス滞在中の記憶であり、ダヴィエルの工藤さん宅のハンバーグ&オニオンライス、タンク・フレール食堂部門の中華丼、ムフタルのレバノン料理、レンヌの安レストラン・カノティエの定食（3品でたった50フラン!!）、苦労話大会で聞いたオーブ県文書館入口立食昼食は手作りサンドイッチと、なぜかいつも食べ物と結びついているのが自分でも不思議だが、とにかくあの頃はともに若く、貧乏で、夢と不安と希望だけがあった……という話をしていると、いくらでも時間がたってゆくし、ぼくにとっても語りたことは山積しているが、残念ながら本稿のタスクは〈工藤さんの研究の到達点を確認し、残された課題を提示する〉という堅苦しい……じゃなくてアカデミックなものらしい（未確認）ので、この辺で止めておきたい。ついでに、アカデミックな作法の常として、ここからは敬称を略することにしよう。

そんなわけで、件の工藤の研究であるが、それは、第1に、19世紀フランス農村部、とくに南部ヴァール県（プロヴァンス地方）と東部オーブ県（シャンパーニュ地方）を対象とする実証的な歴史研究〔②⑬⑮〕と、その副産物あるいは準備作業の産物たるサーベイ〔⑤⑭〕、第2に、いわゆるアナール学派の社会史研究に関する方法的あるいは理論的な考察、ピエール・ノラ編『記憶の場』に示唆された記憶論、恩師・二宮宏之の仕事などをめぐる史学史・歴史学方法論・歴史理論的な考察〔①③④⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫〕、この二者に大別できる。それぞれ代表的な（というか、ぼくが調べたかぎりでの）論文については、冒頭のリストに記載しておいたとおりである。ただし、このうち後者で展開される方法論や理論は前者の分析枠組みとして採用されているので、工藤のメイン・アーギュメントが展開されている主要業績とみなすべきは前者と考えてよい。実際『政治文化』は、前者に属する論文のみを元としている。¹ この点に鑑み、本稿では、工藤の19世紀フランス農村史研究をおもな検討対象とする。

¹ すなわち、同稿は全7章からなるが、第1章は⑭、第2章は⑮、第3章から第5章までは⑬、第6章は②、第7章は⑤を、おのおの改稿したものである。

以下、まず第 2 節では、『政治文化』の元をなす諸論文〔②⑤⑬⑭⑮〕を主要論文と呼称したうえで、それら論文に拠りながら工藤のアーギュメントを再構成し、その意義を測定する。ただし、それだけだとあまり能がないので、ついで第 3 節では、これら主要論文と『政治文化』を比較し、異同を確認する。主要論文のうち『政治文化』に所収されるに際して加筆された部分は〈新たに語りたくなったこと〉であり、削除された部分は〈語られなくなったこと〉であり、また修正された部分は〈気がかわった部分〉に相当すると考えてよい。これはテキスト分析の真似事のような手続きであるが、これによって工藤のアーギュメントの（存在するか否かも含めて）時間的な変遷に接近してみたいというわけである。最後に第 4 節では、工藤が論じのこしたと考えられる点について私見を述べ、工藤の研究のポテンシャルすなわち〈その先〉を展望する。このような作業をおこなうことによって、先述したタスクに応えることを試みたい。

2. アーギュメントの評価

① 要約

工藤の 5 本の主要論文を検討するにあたってまず留意すべきは、主要論文の準備・執筆開始時期と発表時期のあいだには、工藤の慎重な性格と完全主義的な気質を反映してか、ズレが存在するように思われることである。すなわち、ぼくの記憶によれば、大学院修士課程時代の工藤は、モーリス・アギュロンに大きな影響を受け、ヴァール県農村部における社会的結合関係（ソシアビリティ）を研究対象としていた。その後、1989 年にパリ第 1 大学に留学した際、指導教員となったアラン・コルバンに分析対象としてオーブ県をアサインされ、同県農村部を研究しはじめるに至った。² したがって主要論文の準備・執筆開始時期は、⑬が早く、ついで②⑮および副産物たる⑤⑭だったはずである。³

² 工藤は、もともとは南仏（それもヴァール県!!）の専門家にして社会的結合論の提唱者であるアギュロンのもとで学ぶことを希望していたが、パリ第 1 大学教授だったアギュロンが 1986 年にコレージュ・ド・フランス教授に選出されたため、後任たるコルバンのもとで学ぶことになった。工藤が登録したパリ第 1 大学はパリ第 4 大学と合同で「19 世紀史研究センター」を設置している（したがって両大学で 19 世紀史を学ぶ学生は、同センターを学習・研究の拠点とすることになる）が、同センターは、かねてより、19 世紀における各種エリートのプロソポグラフィ分析をテーマとする巨大な共同研究プロジェクトを進めてきたことで知られる。アギュロンやコルバンは同プロジェクトのリーダーを務めてきたが、留学した工藤は、おそらくは、このプロジェクトの一翼を担うべく、コルバンからオーブ県の研究をアサインされたわけである。ただし、彼が手法としてプロソポグラフィ分析をもちいかなかったことから、研究テーマをめぐってコルバンとのあいだでなんらかの（交渉）がなされたことが推測できる。

³ 第二帝制期オーブ県における祭典を分析する②の脚注には、噂を対象とする研究の重要性（脚注[21]）や、その際には県文書館所蔵裁判資料が利用しうることへの言及（脚注[18]）が垣間見られる。祭典の研究（②⑤）と噂の研究（⑭⑮）は、発表時期はおおきく異なるものの、準備・執筆開始はほぼ同時になされたと考えてよい。なお、多分⑬の副産物または準備作業の産物が①である。

主要論文の分析対象をみると、地域はヴァール県 [⑬] とオーブ県の農村部 [②⑤]、時期は復古王制 [⑮]・第二共和制 [⑬]・第二帝制 [②]・第三共和制 [⑤] すなわち 19 世紀全般、テーマは噂 [⑭⑮]・蜂起 [⑬]・祭典 [②⑤] である。⁴

3 つのテーマに即して、彼の具体的なアーギュメントを簡略にサーベイしてみよう。

第 1 に、噂の研究。工藤によれば、噂と事実のあいだにはズレが存在するが、そこには人々の集合的想像力あるいは想像界 (イマジネール)、さらには行動様式や表象システムなど集合的心性が反映されている [⑭]。また、噂の共有・流通メカニズムの背景には、ひとひとが取結ぶ社会的結合関係が存在する。噂の分析は、集合的心性および社会的結合関係というアナール学派社会史研究の最重要課題にアプローチすることを可能にする方策なのである。工藤は、このような見通しに立ち、復古王制期オーブ県におけるナポレオンの帰国に関する噂を対象とする実証的な分析に乗出し、ナポレオンのイメージが「戦士」、「恵みの王」、そして「不死なる存在」へと変化してゆくことを明らかにする [⑮]。そして、その先に、ナポレオンの帰国に関する噂は「権力奪還のためのパリへの進軍」という政治文化を産出したのではないかという仮説を提示する。⁵

第 2 に、蜂起の研究。工藤は、1851 年 12 月ルイ・ナポレオンのクーデタに抵抗して発生した民衆蜂起を取上げ、そこに「農村民衆の政治」の具体的なありかたを見て取ろうとする [⑬]。かく課題を設定するに際して、彼の念頭の背景には、蜂起に参加した民衆は政治化 (politicization[英]、politisation[仏]) していたか否かをめぐる通称〈政治化論争〉があった。⁶ 彼は、ヴァール県の蜂起を実態・組織・参加者の意識といった諸側面から分析し、そのなかで、政治化論争は、そもそも、その二項対立的な問題設定からして誤っているという結論に至る。⁷ 民衆はつねに政治的アクターだったのであり、民衆蜂起は「農村民衆……における〈政治〉の意味の変容」すなわち「政治文化の変容」という観点から理解されるべきだというのである。

第 3 に、祭典の研究。工藤は、第二帝制期をつうじて 8 月 15 日 (ナポレオンの誕生日) に祝われた官製の祭典「国民祭典」の実態をオーブ県について分析し、「政治家間の派閥抗争や司祭と住民の対立など「ローカルな政治文化のうちに構造化されていた軋轢」が「国家の企図に歪みを生じさせた」ことを明らかにする [⑥]。このような歪みは、第二帝制に

⁴ これら 3 つのテーマに即していうと、工藤の主要関心は、主要論文の準備・執筆開始時期から窺えるとおり、蜂起から祭典・噂に移動してゆく。ここには、アギュロン (村の政治の歴史学) の影響圏から脱し、コルバン (感性の政治学) のアーギュメントに惹かれてゆく工藤の姿が見て取れる。

⁵ なお、⑮で工藤が用いているのはオーブ県文書館所蔵の裁判資料 (資料系列 U) および一般行政資料 (同 M) である。前者と後者を比較すると、後者のほうが様々な意味で〈使いやすい〉が、前者には民衆の〈なまの声〉が比較的ダイレクトに残されているという利点がある。

⁶ いうまでもないことかもしれないが、政治化というこの概念は、1970 年代にアギュロンによって提示され、人口に膾炙した (Agulhon, M., *La République au village*, Paris: Plon, 1970)。当初工藤が彼のもとで学ぶことを望んだのは、けだし当然というべきだろう。

⁷ ⑬で用いられている資料は、ヴァール県文書館所蔵の、ここでもまた裁判資料 (資料系列 U) である。工藤は留学前後の時期からすでに裁判資料を利用・分析することの重要性を強調していたが、その先見の明には頭が下がる。

限られたものではない。続く第三共和制期にあっても、共和主義的国民統合を目的として政府が展開した「共和主義祭典」は「共和派村長勢力と伝統的名望家や聖職者とのローカルなヘゲモニー抗争」のなかで解釈され、「ナショナルな政治」（国民統合）と「ローカルな政治」（ヘゲモニー抗争）のあいだに相互作用関係が取結ばれることになる〔⑦〕。

② 貢献

以上のような内容を持つ工藤の主要論文は、論じられるテーマこそ噂、蜂起、祭典と異なり、また時期や地域も様々ではあるが、農村部民衆のローカルな政治文化の様態を問うという問題設定を共有している。そして、19世紀フランス史研究の学説史という（限定的な）文脈でみた場合、彼のアーギュメントの最大の貢献は、政治文化という概念そのものを深く考察し、そのうえで同概念を活用しながら19世紀フランス農村史の通説を全面的に書換えようとしたところにある。

政治文化（political culture）の概念史については、ここで再言する必要はないかもしれない。⁸ 神をも恐れぬほど雑駁に言えば、同概念は、そもそもは1950年代に政治学の領域において「政治システムが埋め込まれている政治行動志向性のパターン」（ガブリエル・アーモンド）を意味するものとして誕生したが、そののちアナル学派社会史学、さらには新文化史学の普及とともに歴史学界に導入されて人口に膾炙し、はやくも1980年代には一種の流行語（バズワード）となった。⁹ そして、この過程において、アナル学派社会史学と新文化史学おのおのの背景をなす学知の影響のもと、歴史学において政治文化が意味するところは大きく変化してゆく。すなわち、ポストモダニズムや政治哲学のアーギュメントを受けて、政治（the politics[英]、la politique[仏]）は秩序のシステムすなわち政治的なるもの（the political[英]、le politique[仏]）を含意するまでに広がった。また、文化人類学の知見とともに、文化（culture）は意味と表象の動的なパターンすなわち文化変容（acculturation）とでもよぶべきものを意味するようになった。¹⁰

1980年代から2000年代にかけて研究生生活を営んだ工藤もまた、歴史学における政治文化論のかくなるトレンドから影響を受けた。ところが「政治文化」という語が頻出する彼

⁸ 政治文化なる概念については、とりあえず Formizano, R., “The concept of political culture” (*Journal of Interdisciplinary History* 31-3, 2001)を参照。

⁹ 1989年のフランス革命二百周年記念シンポジウムの共通テーマが「フランス革命の政治文化」だったことを記憶している諸賢も多いことだろう。

¹⁰ 具体的なキーパーソンは、〈政治〉についてはミシェル・フーコー、ユルゲン・ハーバーマス、ジョン・ポーコック、〈文化〉についてはクリフォード・ギアツあたりだろうか。かくして生じた新しい政治文化概念を歴史研究にもちいた歴史学者は多々いるが、フランス史研究に即していえば、キース・ベーカー、ロジェ・シャルティエ、リン・ハントを挙げておけば十分だろう。全て著名な研究者なので、書誌情報は省略する。

それにしても、こんな話をしていると、〈ラ・ポリティーク〉から〈ル・ポリティーク〉への移行を語り、〈アカルチュレーション〉を〈文化化〉と訳したぼくに〈文化変容〉と訳すべきことを教えてくれた大学院生時代の工藤の姿が思い出される。けだし時は流れるのである。

の主要論文においては、なぜか政治文化の定義は提示されていない。そこで、これは（参加者諸賢にとってはアクセス不可能なので）掟破りではあるが、手稿『政治文化』を参照することにしたい。そのプロローグでは、政治を「人間集団における秩序の形成と解体をめぐって、人が他者に対して、また他者と共に行う営み」と定義したうえで、政治文化とはかくなる「政治を行うに当たって、ある一定の集団に共有される意味のシステム」を意味すると書かれている。工藤が提示する政治文化の定義が、新たな政治文化の概念、すなわち〈政治的なものの文化変容〉と整合的なものであることは明らかだろう。

それでは、19世紀フランス農村史研究における工藤のオリジナリティ・貢献はどこに求められるか。

まず、工藤が眼前にしていた通説を確認しておこう。1970年代に至るまでの通説は〈第三共和制史観〉とでも呼ぶべきものであり、そのキーワードは〈政治化〉と〈名望家〉だったと要約できる。同史観によれば、フランス革命以降のエリートは、なんらかのパワーの所持から生じるパーソナルな影響力（パトロネジ）を民衆に行使することにより、ハイアラーキーの上位に立っていた。このような特徴をもつエリートを、同史観は名望家と呼称する。ところが、19世紀中葉の農村部では、民衆が名望家から政治的に自律化するという現象がみられはじめた。この事態を政治化と呼ぶが、19/20世紀転換期には、政治化した民衆は名望家の影響力行使圏から脱却し、新しい社会構造をうみだした。すなわち、小規模農民や労働者など民衆は、労働組合を結成するなど、独自の政治的社会的経済的なアクターとして行動するようになった。また第三共和制政府は、〈自由、平等、友愛〉というスローガンを掲げ、名望家による支配を打破し、民衆を国民として統合するべく、後者と共闘した——これが、第三共和制史観が描き出す19世紀史像である。¹¹ まとめると、同史観は、フランス革命以降、基本的には政治化と国民統合が進み、両者は第三共和制下に完了すると主張する。これは、両プロセスはスタート（政治的無知、非・国民）からゴール（政治化、国民化）に向かって進むと考えるという点で一種の定向進化論であり、また、両プロセスにおいて民衆は客体に過ぎないとみなす点で一種のエリート史観である。

工藤の課題は、かくなる第三共和制史観を批判的に検討するべく、新たな政治文化（すなわち政治的なものの文化変容）概念をもちいて、同世紀農村部の政治文化の実態と動態を明らかにすることに設定された。新たな政治文化概念をもちいて民衆の行動・思想・心性を分析すると、彼らは独自の政治的アクターとみなされるべきことがわかる。また、政治化や国民統合のプロセスは（共和派名望家、聖職者、行政官、共和派民衆、反政府派労働者などなど）複数のアクターが相互に作用しあうなかでジグザグな動きを辿ったといふべきである。歴史は、それほど単純なものではないのだ。

第三共和制史観の19世紀史像は、第三共和制支持派が自己正当化のために用いてきたツールであり、その意味でイデオロギー的な性格を色濃く帯びている。¹² 農村部の実態

¹¹ 政治化論の代表的な論者は先述したとおりアギュロンであり、名望家論の代表的な論者は20世紀前半に活躍した政治評論家ダニエル・アレヴィ（Halévy, D., *La Fin des notables*, Paris: Grasset, 1930; Id., *La République des Ducs*, Paris: Grasset, 1937）である。

¹² この点をいち早く1960年代に明らかにしたのは、喜安朗である。彼の先見の明にも頭が下がる。同「フランス第3共和政の形成と政治支配の論理」（『歴史学研究』350、1969）、同「第三共和政の形成と

に即してこの点を具体的に明らかにしたところ、工藤の研究の最大のオリジナリティにして貢献であるといつてよい。

3. テクストの比較

① 削除

ここでは、工藤の手稿『政治文化』と、その元をなしている主要論文〔②⑤⑬⑭⑮〕を比較し、後者から前者が紡がれるにあたり、なにが削除され、なにが加筆され、なにが修正されたかを確認してみたい。もちろん、前者には、シリーズの一冊をなすという性格上、枚数的な制約があったはずであり、字数制限のない後者の一部を削除することはやむをえない措置である。ただし、どこを削除するかは著者の意図的な選択の結果であり、そこにはアーギュメントの各部分に対する自己評価の変化が反映されざるをえない。加筆にしてもしかり、修正にしてもしかりである。

まず削除であるが、驚くべきは、主要論文が『政治文化』にとりまとめられる過程で削除された箇所がきわめて少ないことである。すなわち主要論文において一定（すなわち一文を超える）程度の規模の削除箇所は、わずか6箇所にとどまっている。¹³

しかも、これらは、ほとんどが工藤のアーギュメントそのものとは無関係な箇所である。これは、彼のアーギュメントが、その研究生生活の全期間にわたって恐るべき論旨の一貫性を保っていたことを推測させる事実である（が、加筆や修正の箇所をみると、そこまで誉めるのはさすがにヘンであることが判明するであらう）。

具体的にいうと、②[p.47]は、論文執筆時に2つしかなかった先行研究の異同を確定したが、『政治文化』を編むまでに他の研究が出現したため時代遅れとなった箇所である。②の残り2箇所[pp.48, 52-3]は、1994年に発表された当該論文の執筆時点における今後の展望であり、『政治文化』を編む時点ではこれまた時代遅れとなった箇所である。⑭[pp.77-8]は、論文の結論部分において主要な先行研究（フランソワ・プルー）の所説との異同を再確認している箇所であり、必要性に乏しい。⑮[pp.149-150]は結論部分における論文の要約であり、他の論文とあわせて一書をなすに際しては不要である。なお、最後の⑤[p.40]は、第三共和制期の国民祭に参加した「学童の大隊」活動内容を具体的に説明している箇所であり、その存否はアーギュメントの内容を左右するものではないが、ここを削除した意図はいまいち不明である。

② 加筆

フランス急進主義」（『日本女子大学紀要・文学部編』21、1971）などを参照。

¹³ 具体的には、②が3箇所（pp.47, 48, 52-3）、⑤が1箇所（p.40）、⑬はなし、⑭が1箇所（pp.77-8）、⑮が1箇所（pp.149-150）である。

次に加筆であるが、一定規模の加筆は、主要論文全体で 10 箇所強である。その多くは、論文準備・執筆開始時期が早かった②と⑤を対象としている。そのなかには、②[p.47]など論文発表後に出現した関連研究をとりあげて紹介・評価した箇所をはじめ、アーギュメントに直接関わらないものもあるが、いくつかのテーマについて、主要論文執筆時から『政治文化』編集時に至るあいだに工藤が考察を付加・深化・変化させたことをうかがわせる箇所も存在する。

これらテーマに関わる加筆としては、次の 5 つが指摘できる。

第 1 は、政治文化における宗教・カトリック教会の位置付けに関わる加筆である。たとえば②[p.51]では、ナポレオンの誕生日を祝祭日とするにあたり、第一帝制は守護聖人際という枠組みを用いたことが加筆された。また、第二帝制期の国民祭典については、②[p.62]で、その反（または非）カトリック教会的な性格を強調する加筆がなされた。

第 2 は、政治文化とりわけローカルな政治文化の変化の相を捉えようとする意思が出現したことを反映する加筆である。すなわち、②[p.53]では、第二帝制期の国民祭典について、「時代とともに新しい要素も加わる」として、退役軍人・学校児童・教員の存在が大きくなってゆくことが加筆された。

第 3 は、祭典などで表象されるローカルな政治文化の自発的・自律的な性格を強調する方向でなされた加筆である。すなわち、②[p.53]では、国民祭典について「コミュニケーションの自発的・創造的祝賀行為の場ともなった」という形容詞が追加された。

第 4 は、ローカルな政治文化とナショナルな政治文化の関係に関する考察を深化させたことから生じた加筆である。すなわち⑤[p.46]では、⑤を最終章とする『政治文化』全体をしめくくるべく、ダニエル・ファールが提唱する「コミュニナリズム」という概念をもちいながら、両者は峻別されるべきであるが、それと同時に、単に相対立していたわけではなく、複雑な関係を取結ぶなかで「国民化」すなわち国民統合を促してゆくと捉えるべきであることが、長大な加筆によって強調された。¹⁴

第 5 は、政治文化と社会的結合関係の関係を問おうとする意思の産物としての加筆である。すなわち⑤[p.62]で、工藤は「社会的あるいは領域的集団」（コルバン）という文言に新たに脚注を付し、「コルバンの言う社会的あるいは領域的集団は、シブタニの言う公衆の母体になると筆者は考える」と述べた。社会的あるいは領域的集団は社会的結合関係の担い手であり、公衆は政治文化の担い手である。工藤は、彼の研究生活における問題関心の中核をなす 2 つの分析概念について、両者の関係の検討を志していた。

これら加筆は、かなり強引にまとめると、大略〈ローカルな政治文化の性格・構造・機能を動的に捉えるにはどうすればよいか〉という問題設定をめぐる工藤の試行錯誤のプロセスを反映している。

すなわち、工藤が批判した 19 世紀フランス農村史研究の（1970 年代までの）通説たる第三共和制史観において、ローカルな政治文化、さらにはそれを包摂する民衆文化は、自

¹⁴ 工藤がいう「国民化」は国民統合とほぼ同義と考えてよい。それでは、『思想』の特集「国民化とはなにか」の一環として発表された⑤を『政治文化』に取りまとめるに際して、工藤はなぜ「国民化」という語を維持したのだろうか。国民統合と呼びかえてもよいのに。その背景には国民統合が第三共和制史観を強く連想させることがあったというのが、根拠なきぼくの推測である。

発的・自律的・自己完結的であり、またナショナルな政治文化やエリート文化から一方向的な影響を受けるという関係にある〈変わらざるもの〉として在った。これに対して工藤は、ローカルな政治文化・民衆文化の自発性・自律性を肯定しつつも、それを、単にナショナルな政治文化・エリート文化の影響（というよりは圧力）のもとに変化を余儀なくされる受動的な存在ではなく、社会的結合関係を背景として、後者との相互関係のなかで変容してゆく能動的な（まさに）主体として捉えるべきことを説き、またそのようなものとして把握・叙述・分析するための方策を探求した。その成否は別として、ここでみた加筆の軌跡からは、工藤の苦闘の跡が伺える。

③修正

最後に修正であるが、一定規模の修正は、主要論文全体で 10 箇所前後である。その多くは、ここでもまた論文準備・執筆開始時期が早かった②と⑤を対象としているが、工藤のアーギュメントの変動と研究上の苦闘の跡を見て取りうるのは、削除や加筆ではなくこれら修正箇所である。もちろんそのなかには、第二帝制期におけるナポレオン三世のイメージを「アンシャン・レジームへの回帰に対する最大の障壁」〔②p.57〕から「大衆的繁栄の保証者」に修正するなど、実証的な次元における評価の変化を反映した修正も存在する。ただし、その多くは、先述した〈ローカルな政治文化の性格・構造・機能を動的に捉えるにはどうすればよいか〉という問題設定に関わる思索の結果として生じたものだった。彼の思索は、先述した加筆のテーマとおおきくオーバーラップするが、次の 2 つのアーギュメントに結実する。

第 1 に、ローカルな政治文化・民衆文化は自発的あるいは自律的で、しかしながら可変的な性格をもっていた。

たとえば、ルイ・ボナパルトのクーデタに対する抵抗運動の中にアギュロンが見出したものは「二つの文化水準 (niveaux de culture)」〔⑬pp.258, 272〕から「二つの文化的層位」と呼びかえられた。「水準」が上下関係をイメージさせるのに対して、「層位」は自律的・重層的な並存をイメージさせる。そしてまた、ローカルな政治文化・民衆文化とナショナルな政治文化・エリート文化とのあいだの関係は、論文の段階では十分に把握できていなかった〔②p.56〕のに対して、『政治文化』では、両者が戦略的に相手に働きかける相互作用の総体として捉えられるに至った。

かくのごとくローカルな政治文化・民衆文化を把握する際のキーワードとなる概念は、おそらくは「道具」である〔②p.64〕。工藤によれば、民衆とエリートの双方は、ローカルあるいはナショナルな政治文化のさまざまな構成要素を、みずからの生活に役立つべき「道具」として捉え、利用し、そのなかで自己も変容を遂げていったのである。

第 2 に、ローカルな政治文化・民衆文化は、社会的結合関係を社会経済的な背景・基盤としていた。

すなわち、第二帝制期の国民祭典のなかに見出された「ローカルな政治文化のうちに構造化されていた軋轢」〔②p.60〕は「地域社会の関係網のうちに包含されていた軋轢」と言い換えられた。前者ではイマイチ不明だった軋轢の次元が、後者では社会経済的な次元、すなわち社会的結合関係に照準されている。

このように政治文化と社会的結合関係を明確に区別し、両者の関係を（再）設定することにより、工藤は第三共和制期にみられた農村部民衆の国民化（国民統合）を第三共和制史観と異なるかたちで、ただし動態的に描き出すことができた。すなわ「ナショナルな政治の定型要素」は「道具として用いられ」ることによって「ローカルな政治文化を習俗とする人びとの織り成す関係網のうちに深く組み込まれる」〔⑤pp.45-6に相当〕ことになり、このプロセスのうちに農村部民衆の国民化が進んでゆく、というのである。

主要論文と『政治文化』を比較し、削除・加筆・修正のあとをたどることは、工藤が考えてきたことに接近するためのひとつの方策として有益である。19世紀フランス農村部における政治文化と社会的結合関係という問題関心は、工藤が研究生生活の初発から一貫して保持してきたものだった。ただし、前者の捉えかたと、両者の関係という2つのポイントについては、とりわけ1990年代の工藤は、いまだ明確な解釈・把握を示していないといっている。その後の工藤の研究生生活は、なによりもまず、この課題に取り組むことに向けられ、そして、彼は『政治文化』を編む段階において一定の結論に達したように思われる。

4.残された課題

ここまで、19世紀フランス農村史に関する工藤のアーギュメントを要約し、評価し、その変遷を（ほんのちょっとではあるが）たどってきた。工藤とほぼ同じテーマを数年遅れで追いかけてきたものとして、ぼくは、彼のアーギュメントの意味、知的営為の意義、その到達点をたかく評価する。とりわけ、19世紀フランス農村における政治文化と社会的結合関係を理解するに際して必要・有益な理論・方法論・研究史を十分に吸収・消化して活用した知的誠実さと、ヴァール県およびオーブ県における広範なアーカイヴァル・ワークに費やされたリソースやエネルギーの量は、同業者としてみると、国際標準の水準に達しているといっても過言ではない。要するに、フランス語に訳されれば、そのまま彼の地で通用しただろうということである。

かくのごとく工藤の業績をたかく評価するぼくだが、だからといって彼のアーギュメントに全面的に同意するとか、彼の営為は付け加えるべきものなき完璧なものであるなどというつもりはない。1851年反乱に関する工藤のアーギュメント〔⑬、のち『政治文化』第3章から第5章まで〕の仮想敵がぼくの旧稿だったことからわかるとおり、ぼくと工藤のあいだには、同反乱、ひろく19世紀フランス農村部の政治文化、さらには19世紀フランス農村部をいかに捉えるべきかをめぐり、大きな懸隔がある。¹⁵ ここでは、そんな立場から、工藤のアーギュメントの問題点・欠点を指摘し、ぼくらに残された課題として再構

¹⁵ 小田中直樹「19世紀フランスにおける農村民衆の『政治化』をめぐって」(『土地制度史学』118、1988)、同「もうひとつの近代フランス史研究の胎動？」(『史学雑誌』107-10、1998)を参照。ただし、のちに『19世紀フランス社会政治史』(山川出版社、2013)を取りまとめる段階において、ぼくは工藤のアーギュメントに大きく接近することになった。先達のふところは、かくも広いのである。

成してみたい。¹⁶

その場合、ぼくらが問題にするべきは、第1に、定向進化論的でエリート主義的な第三共和制史観と異なるかたちで、19世紀フランス農村部のローカルな政治文化・民衆文化の性格・構造・機能を、社会的結合関係との関係に留意しながら動的に捉えるという工藤の問題設定の適切性、第2に、「道具」という概念をキーワードにしながらかこのタスクに取り組むという工藤の営為の妥当性と達成度、この2点である。

前者からみてみよう。第三共和制史観に定向進化論的でエリート主義的だという欠点があることは事実である。また、ローカルな政治文化・民衆文化を動的に捉えるというスタンスも、歴史学が時間的な変化を（その存否も含めて）対象とする学問領域であることを考えれば、けだし当然というべきだろう。

ただし、ローカルな政治文化・民衆文化を担うアクターとして農村部民衆を設定し、彼らを自発的・自律的な存在と捉える工藤の立論には、一定の疑問が残る。すなわち、もちろん、第三共和制史観のように、彼らはそもそも非自発的で他律的だったとア prioriに仮定することは正しくない。ただし、工藤においては、彼らの自発性・自律性はア prioriに仮定されており、そのように判断する根拠は明らかにされていない。明らかにこれでは不十分である。

後者については、「道具」概念の利用は、政治文化と社会的結合関係の関係、ローカルな政治文化・民衆文化とナショナルな政治文化・エリート文化の関係、民衆とエリートの関係、農村部と都市部の関係、さらには国民化のプロセスなどを動的に理解するうえで、重要かつ適切である。

ただし、同概念をもちいて工藤が描き出す19世紀農村部は、動的ではあるが、時系列的な変化に欠けるといふ印象を与える。それは、農村部における動態（ダイナミクス）

¹⁶ なお、実証的な論文〔②⑬⑮〕が少ないとか、主要論文や『政治文化』において展開されたアーギュメントが今日の、あるいは主要論文の過半〔⑬⑭⑮〕が発表され『政治文化』が準備された21世紀冒頭の時点からみて旧くなっているとかいった点を問題点・欠点として提示することも可能だろう。もっとも、可能だろうし、科学における評価とはかくも峻厳なものなのかもしれないが、本稿のタスクにとっては、そういったスタンスは魅力がない。生産的な営為を生みそうもないからだ。

ちなみに、工藤に実証的な論文が少ないこと背景には、1992年に3年間の留学から帰国してパーマネント・ポストに就いて以降、長期間の在外研究をおこなうべくフランスを再訪する機会には恵まれなかったという事情があるように思われる。おそらくは勤務先の多忙その他の諸事由と、そして近年は体調が、フランスに長期滞在することを妨げたのだろう。もちろん長期滞在すればよいというものではないが、近年、19世紀史研究に利用しうる県文書館・市町村文書館所収資料のありかたと、資料収集に利用できるツールがおおきく変貌してきただけに、工藤ならばこの変貌をいかに活用したろうか……と、件の「歴史にifはない」という格言に反する、歴史学者失格の想いをめぐらせてみたくなるのである。

また、⑬⑭⑮など、準備・執筆開始から発表までにかかなり長い時間がかかった論文や、それを取りまとめた『政治文化』には、この間に同一テーマを論じた研究がフランスはじめ各地で出現し、それに対応するべく四苦八苦する工藤の姿が見て取れる。ここからぼくらが汲取るべき教訓は〈四苦八苦することが大切だ〉ということである。

のメカニズム、とりわけその駆動因が明示されていないためである。¹⁷ すなわち「道具」概念をもちいたせいか、工藤が描き出す農村部は、それなりに自発的・自律的なアクターが、自己の利益を最大化するべく、みずからの手中にある「道具」をもちいて戦略的に行動し、作用しあうゲームの場（フィールド）の様相を呈している。しなしながら、そこにおいて、アクターおのおのがなぜその「道具」や戦略を採用するのかは不明である。また彼らを取り交わす相互作用がいかなるメカニズム、とりわけいかなる因果関係を内包しているのかも不明である。その結果〈たしかに動いてはいるが、どの方向に・なぜ変化してゆくのかはわからない〉歴史が紡がれることになる。動的ではあるが、時系列的な変化に欠けるというのは、つまりはそういうことである。

そうであれば、工藤がぼくらに残した課題は明らかだろう。

まずは、政治文化ひろくは文化の次元における自発性・自律性を明確に定義したうえで、具体的な事実にもとづいて、農村部民衆におけるその存否を実証的に確定することである。あるいはまた、〈自発性〉や〈自律性〉を分析概念として設定することも、ひとつのありうる手続きだろう。後者の場合は、設定したタスクの遂行にあたって当該概念を利用することの有益性・有効性を証明する必要がある。

そのうえで、農村部を場とし、政治文化や社会的結合関係などさまざまな次元において見出されるリソースが「道具」としてもちいられる戦略的相互作用すなわちゲームとしての日常生活について、そのメカニズムとりわけ因果関係を、時系列的な変化の側面に留意しながら解明かすことである。¹⁸

こういった手続きにもとづき、フランス農村部を〈時系列的な次元において動的に、かつロジカルに〉捉えるとき、はじめて工藤が設定したタスクはクリアされたことになるだろう。

5.おわりに

ぼくは工藤と、あまりにも問題関心や研究対象や研究内容が類似しており、また、会話や書簡を通じてあまりにも多くのものを学んできたため、彼の研究者人生を的確に評価できているか否か、いまいち自信がない。しかし、学術的な研究は、批判され、乗越えられ、場合によっては否定されることによって、はじめて研究史のなかに位置づけられる。本稿は、19世紀フランス農村史を対象とする研究史のなかに工藤を位置づけるためのささやかな（わりには冗漫なほどに長い）試みであった。

最後にひとこと、工藤光一『近代フランス農村世界の政治文化—噂・蜂起・祝祭』（岩波書店・岩波歴史選書）は一体いつ刊行されるのか？

¹⁷ これは⑭が「噂のダイナミクス」（のち『政治文化』に編むに際して「ダイナミズム」に変更されている）をタイトルに掲げていることからすると、いささか皮肉な事態である。

¹⁸ ちなみに、ぼくは『社会政治史』のなかで、「ローカル・ガバナンス」をキーワードとして、この問題に取組んでみた……が、成功したか否かは「？」である。

工藤光一業績リスト (代表的なもののみ)

- ① 「移行期における民衆の〈ソシアビリテ〉」(『社会史研究』8、1988)
- ② 「〈国民祭典〉と農村世界の政治文化—第二帝政下のシャンパーニュ地方」(『思想』836、1994)
- ③ 「フランス近代農村史研究からの若干の考察」(二宮宏之編『結びあうかたち—ソシアビリテ論の射程』、山川出版社、1995)
- ④ 「〈暴力と文明化〉の文化=政治史—アラン・コルバンの所論を追って」(『ふらんぼー』22、1995)
- ⑤ 「祝祭と〈国民化〉—19世紀末フランス第3共和政下の共和主義祭典」(『思想』884、1998)
- ⑥ 「国民国家と〈伝統〉の創出—1870-1914年、フランスの事例から」(『岩波講座世界歴史18 工業化と国民形成』、岩波書店、1998)
- ⑦ 「記憶の不協和音としての〈共和政〉—〈共和政フランス〉と集合的記憶」(『Quadrante』2、2000)
- ⑧ 「〈ソシアビリテ〉から〈集い〉へ」(森村敏己・山根徹哉編『〈集い〉のかたち—歴史のなかの人間関係』、柏書房、2004)
- ⑨ 「記録なき個人の歴史を書く—アラン・コルバンの試みが意味するもの」(『歴史を問う4 歴史はいかに書かれるか』、岩波書店、2004)
- ⑩ 「『記憶の場』と現代フランスの歴史叙述」(『Quadrante』6、2004)
- ⑪ 「二宮宏之先生を語る」(『Quadrante』9、2007)
- ⑫ 「二宮史学にとってのフランス現代歴史学」(『ふらんぼー』32/33、2007)
- ⑬ 「1851年蜂起と農村民衆の〈政治〉—バス=プロヴァンス地方ヴァール県の事例を中心に」(『Quadrante』10、2008)
- ⑭ 「19世紀フランス農民世界における噂のダイナミクス」(『Quadrante』14、2012)
- ⑮ 「噂と政治的想像界—ルイ18世治下におけるナポレオンに関する噂、シャンパーニュ地方オーブ県を中心に」(『Quadrante』15、2013)